

**大学コンソーシアム富山 地域課題解決事業
平成 29 年度 地域課題提案書 (新規・継続)**

自治体等名	滑 川 市	担当者	所属 氏名 Tel E-mail	総務部企画政策課 小 川 勇 二 076-475-2111(内 221) y_ogawa@city.namerikawa.toyama.jp
地域課題名	若者の視点で紹介する滑川市 (ガイドブック等の作成)		事業費	200千円程度
地域課題の背景	<p>全国的な人口減少、東京圏への一極集中問題など、地方を取り巻く環境が厳しさを増す中、本市が元気に持続していくためには、交流人口の拡大も重要な施策のひとつである。</p> <p>滑川市人口ビジョンによると、20～39歳の若い世代の首都圏や富山市への転出者が多く、転出超過となっている。</p> <p>若者の視点から、滑川市をチェックし、その良さや魅力を発信していくことにより、交流人口の増加、地域の活性化を目指す。</p>			
課題の概要	<p>(1)課題＝解決したい問題の説明、(2)その課題解決において自治体が行うこと、(3)高等教育機関に求めたいこと、についてできるだけ具体的に記入願います)</p> <p>(1)若者の視点による本市のPRポイントの発見、紹介による地域の活性化及び交流人口の増加</p> <p>(2)関係機関や団体等との協議の場の設置、連絡調整、情報提供など報告書の作成</p> <p>(3)フィールドワークによる地域点検 ガイドマップ等の作成 効果的な情報発信について</p>			
事業実施に当たっての協働体制	<p>【自治体等の役割】</p> <p>学生等の活動に対する支援、情報提供など</p> <p>【高等教育機関の役割】</p> <p>調査、研究、発表、成果品の作成など</p>			
成果の活用方法	<p>本市の観光情報として滑川市観光協会と連携し、市民への周知、ホームページやSNS、その他学生の提案等による方法によって、広くPRしていく。</p>			

作成上の注意

- 「事業費」欄は、高等教育機関に対し支出する金額を記入願います。
(自治体等からの事業費が、本事業実施経費の全額となります。)

他県から来た若者が創る「オンライン・ガイドマップなめりかわ」

(滑川市)

提案・指導教員 富山県立大学 工学部 准教授 清水義彦

(参加学生) 竹内章裕(3年)、山崎裕貴(2年)、伊藤拓海(1年)、柿木里菜(1年)
加藤 希(1年)、川端大智(1年)、北出 丈(1年)、小池祐生(1年)
杉田まりな(1年)、鈴木康太(1年)、鈴木優斗(1年)、東城克哉(1年)
羽場太一(1年)、松岡志帆(1年)、山原健汰(1年)、渡辺健太(1年)

1 課題解決策の要約

滑川市の抱える課題は、人口減少に歯止めをかけることであり、その打開策として「首都圏、他県の 20～30 代の若い世代の滑川市への移住促進」に取り組んでいる。今回の学生の活動は、移住の前にまずは滑川市を訪れ、滑川市の魅力に触れる交流人口を増やそうと、滑川市の魅力発信のホームページを開設し、移住促進へ向けての第 1 歩を目指した。ホームページで発信する情報は、滑川市への先入観、固定観念が全くない他県出身の大学 1 年生が作成した。そして、滑川市民が日頃見落としがちな滑川の良さをリストアップし、「滑川・びっくりスポット(NBS)」と題し紹介するオンライン・ガイドマップを制作した。こうした発信を通して、交流人口増加のきっかけをつくり、地域の活力を高め、将来の定住人口増加につなげることを目指した。大学入学直後の 1 年生 14 名をティーチングアシスタント(TA)2 名(3 年生、2 年生)が指導しながら、平成 29 年度 4 月から平成 30 年 2 月までの約 1 年間取り組んだ。

2 調査研究(企画・実施を含む。)の目的

今回の企画は、他県からの交流人口を増やすことである。そのためには、他県の人が滑川市の情報に触れ、「ここ行きたい。これ見てみたい。これやってみたい。追体験してみたい。」と思わせることが必要であると考え、まず事前調査として、人々の情報入手経路を調査することを 1 つ目の目的とした。二つ目に、滑川市の魅力を伝えるために、どんな媒体で、どんな情報を発信するべきか、という具体策を検討した。そして、実際に行動して、人々の動きを調査することとした。

3 調査研究(企画・実施を含む。)の内容

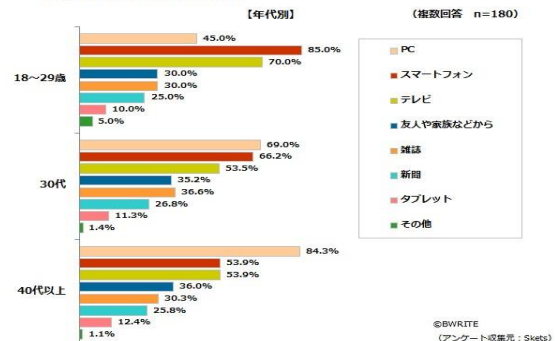
3.1 事前調査と企画・実施に向けての方向性

右の資料1をもとに、学生が考察を行った。学生の考察、結論は、以下の通りである。

(考察)

- ・世代を問わず、情報入手経路は、インターネット経由が圧倒的に多いことが分かった。
- ・それに対して、新聞・雑誌は、PC、スマートフォンの半分程度の利用率だということが分かった。
- ・人々が得る情報は、インターネット経由が紙媒体からの情報を大きく引き離していることが分かった。

Q4：あなたは普段、「プライベートで知りたい情報」を何を使って見えていますか？よく使う方法を全てお選びください。



資料1 人々の情報収集経路(年代別)

(企画・実施に向けての方向性)

- ・発信は、パンフレット、チラシなど紙面ではなく、ホームページ(HP)が効果的だと考える。
- ・インターネット経由であれば、地理的に遠く離れた人にも容易に滑川市の魅力を届けることができる。
- ・情報発信の手段として、滑川市の魅力発信するホームページを立ち上げるべきである。

3. 2企画・実施

事前調査から、滑川市の魅力発信する情報発信の手段として、ホームページを立ち上げることにした。次の課題は、実際に「だれが」、「どんなコンテンツ」を発信していくのか、という企画・実施である。以下、その詳細である。

3. 2. 1 担当とスケジュール

担当者 : 他県出身の富山県立大学1年生14名が行った。

実施時間: 入学直後の4月より、木曜3コマ目の教養ゼミの時間を使った。

取材頻度: 2週間に1回を目標に定期的取材し、NBSを写真と文章にまとめた。

サイクル : 「事前調査→取材→原稿作成→検討会→記事をアップ」、という流れで行った。

授業外活動時間の方が長かった。最終ページのAppendixにスケジュールを掲載した。

黄色の網掛けの授業が滑川訪問日である。30回の授業のうち、13回滑川を訪問した。

学生はこれ以外にも、週末のイベント取材などで個別に滑川市を訪問した。

3. 2. 2 ホームページとコンテンツ

右の資料2は、学生が制作したホームページのトップ画面である。「なめりかわびっくりスポット(NBS)」の名称で、3年生TAが中心となって構築した。スマートフォンで見ると見やすいと想定し、スマートフォン対応型とした。発信するコンテンツは、1年生14名が担当し、「ひと」、「こと(イベント)」、「ばしょ」、「しぜん」の4つのカテゴリに分けて、取材した。

ホームページ上では、以下のトップ画面の地図上に、4つの色分けをした。4色に分けたプレスマークスをクリックすると写真と文字のリンクに飛ぶ仕組みである。

制作したコンテンツは70本である。



資料2 ホームページのトップ画面

検索ワード : 「滑川 BS」



URL: <http://namerikawa-bs.sakura.ne.jp/>

QRコード

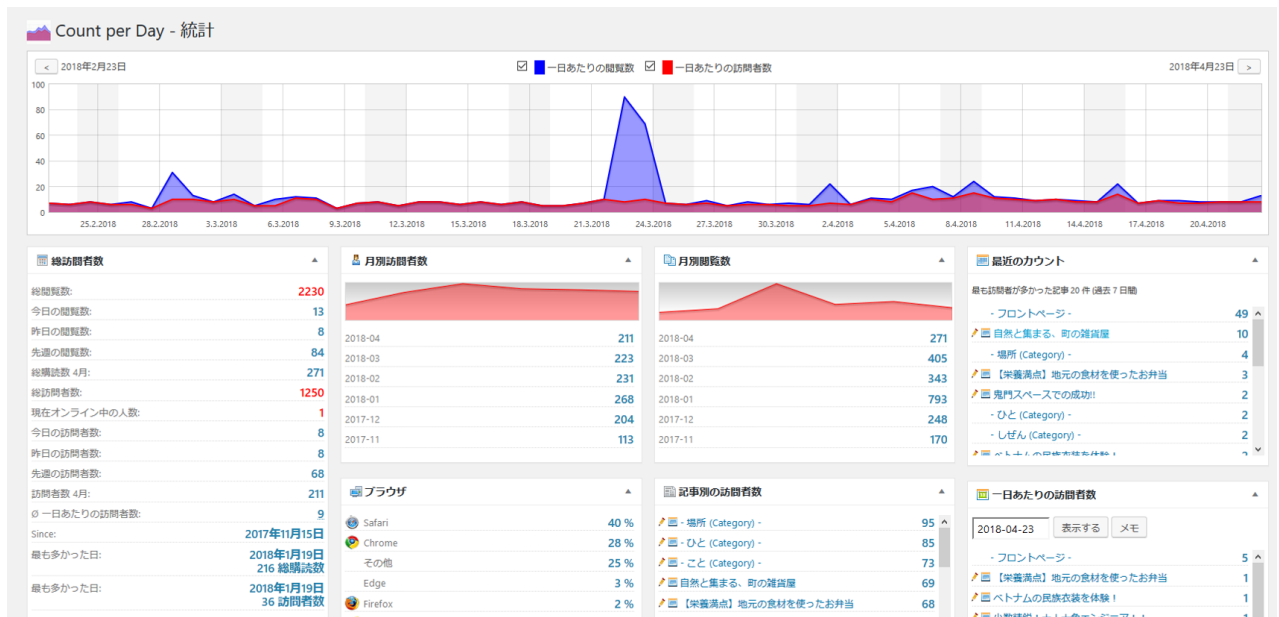
4 調査研究(企画・実施を含む。)の成果

以下の資料3は、ホームページへのアクセス数に関する統計である。平成29年11月15日の試験公開以来、アクセス数を見ると、毎日コンスタントにアクセスがあり、平成30年4月20日現在で閲覧数は2230回、訪問者数は1250名である。1月18日の北日本新聞、3月の滑川市の広報などに上げられたときは、一日に200名の訪問者があった。3月22日から25日にかけて閲覧数が約100件と大きく伸びているのは、3月のホテルイカ海上観光が始まり県内外から滑川市に観光客が訪れ始めた期間と重なり、このホームページが情報収集経路として活用されたのではないかと推測している。今後滑川市を訪れる交流人口の増加につながることを期待している。

今後の課題として、1月の滑川市での成果報告会で学生が、以下の3点を課題としてまとめた。

- ・滑川市の刊行物にこの「オンライン・ガイドマップ」の宣伝とQRコードを掲載いただく。

- ・QRコードが載ったチラシなど市内のお店に置かせてもらう。
- ・滑川市のHPのトップページ右側にこのHPの存在を知らせるアイコンを載せていただく。



資料3 ホームページへのアクセス数に関する統計

今回の事業は終了したが、今後、次年度のゼミ生が記事の更新と充実をめざして、ボランティアで取り組むことにしている。

5 調査研究(企画・実施を含む。)に基づく提言

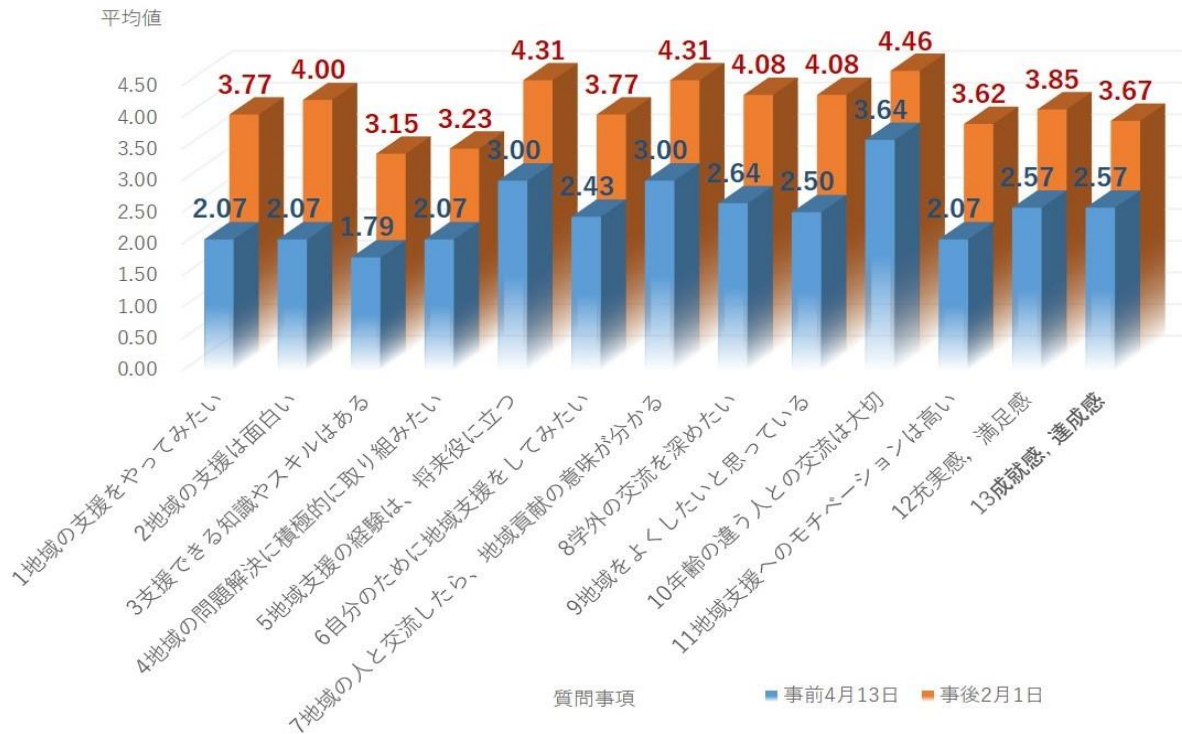
今回、取り組んだ課題は、首都圏から滑川市への20～30代の移住促進のステップとして、交流人口を増やすことであった。しかしながら、一朝一夕に解決できる問題ではない。まずは、今後も今回の取り組みを継続すること、これが大事と思われる。NPO 団体、いろんな機関との連携で、大きなネットワークになかで、情報発信、更新していくことが大切と考える。

今回の他県出身の14名の学生は、移住の前にまずは滑川市の交流人口を増やすそうと、見知らぬ滑川市の魅力発信に多くの時間をかけた。今まで、他県の若者が滑川市に定期的の回遊し滑川市の魅力を調べ上げる取り組みはなかったと思っている。他県の若者が滑川市を長期にわたり回遊した今回のこの過程の中に成果になる可能性が潜んでいるかもしれない。1年を通して、滑川市の住民と触れ合い、学生一人ひとりに個々のネットワークができあがった。8月「ランタン祭り」、11月「収穫祭」をはじめ、30年度もボランティアに入る学生もたくさんいる。このように、学生と滑川市民のネットワークから、今後インターンシップ、就職、定住となる可能性も考えられる。それを意識して、最後は「ひと」の取材を入れた。この「ひと」の取材は、一人の学生が滑川市を盛り上げようと頑張っている人を1名選び、1か月にわたって取材し、発信することであった。一番印象に残ったと、どの学生も語った。このように、行政機関と教育機関が連携し、他県からの若者が滑川市を何度も訪れ、楽しい体験、有意義な経験を積むプログラム、その環境構築が長期的に見て有益な成果をもたらすのではないかと感じている。このような活動から交流が生まれ、その後のインターンシップ→滑川市で就職→定住、という可能性も十分にあると感じる。滑川市を盛り上げようと頑張っているNPOと行政と連携して、ハード面(補助制度、企画、行事など)の整備は着実に進んでいる。あと必要なのは、ソフト面(行事、企画に協力する「若者」)である。足りないのは、滑川に足を運び、

市内を回遊する「若者」である。その部分は、本大学など教育機関ができるところであり、今後ますます行政、NPO、教育機関の連携で、ハードを活かすソフトが必要と感じた。

6 課題解決策の自己評価

以下の資料4は、1年間課題解決事業に取り組んだ清水ゼミ生14名の自己評価結果である。14名は、事前・事後の意識の変化を質問紙(13項目)で自己評価した。以下がその結果である。



資料4 課題解決事業に取り組んだ学生の事前・事後の意識の変化(自己評価)

手前のグラフが事前(平成29年度4月13日)の14名の意識の平均値であり、後方のグラフは終了後(平成30年2月1日)の14名の意識の平均値を表す。評価尺度は、5件法(1.思わない、2.あまり思わない、3.どちらでもない、4.そう思う、5.とても思う)である。事前の平均値を見ると、ほとんどが2点台であり、「あまり思わない」、「どちらでもない」と、地域の課題解決には興味を示さない「消極的な学生集団」であることが事前に推測できた。ゼミの選択時に、清水ゼミを第1希望に選んだ学生がほとんどいなかった実態から、この数値は妥当と思われた。1年間の事業が継続できるのかと、開始前に不安を感じたが、終了時の平均値は、ほとんど4点「そう思う」の前後の数値であった。学生たちは、地域の課題解決には興味をあまり示さない「消極的な学生集団」→地域の課題解決への意識を持った「積極的な学生集団」へと大きく変容したとすれば、本事業は教育効果があったと言える。

次に、13項目の平均値をエクセルに入力し、統計処理ソフトウェア SPSS® Statistics Version22 (IBM®)を使って平均値の差を統計処理(t検定)し、事前・事後の有意差から今回の取り組みの教育効果を推測した。以下の資料5はその結果である。

質問項目	事前調査		事後調査		対応サンプルの差		t	df	p		d
	M	SD	M	SD	M	SD					
1 地域の支援をやってみたい	2.15	1.34	3.77	0.83	1.62	1.33	4.39	12	.001	**	1.55
2 地域の支援をは面白い	2.15	1.28	4.00	0.71	1.85	1.21	5.48	12	0.000	***	1.78
3 支援できる知識やスキルはある	1.85	0.90	3.15	0.69	1.31	0.95	4.98	12	.000	***	1.63
4 地域の問題解決に積極的に取り組みたい	2.08	1.04	3.23	0.44	1.15	1.07	3.89	12	.002	**	1.45
5 地域支援の経験は、将来役に立つ	3.00	0.91	4.31	0.95	1.31	1.03	4.57	12	.001	**	1.41
6 自分のために地域支援してみたい	2.46	1.20	3.77	0.83	1.31	1.38	3.42	12	.005	*	1.27
7 地域の人と交流したら、地域貢献の意味が分かる	3.15	1.21	4.31	0.85	1.15	1.14	3.64	12	.003	**	1.10
8 学外の交流を深めたい	2.77	1.30	4.08	0.76	1.31	1.11	4.25	12	.001	**	1.23
9 地域をよくしたいと思っている	2.62	1.19	4.08	0.86	1.46	1.27	4.16	12	.001	**	1.40
10 年齢の違う人との交流は大切	3.77	1.30	4.46	0.78	0.69	1.18	2.11	12	.056		0.65
11 地域支援へのモチベーションは高い	2.15	1.28	3.62	1.04	1.46	1.45	3.63	12	.003	**	1.25
12 充実感, 満足感	2.54	0.66	3.85	0.69	1.31	0.95	4.98	12	.000	***	1.94
13 成就感, 達成感	2.54	0.66	3.67	0.78	1.23	0.93	7.73	12	.000	***	1.64

***:p<0.001 **:p<0.01 *:p<0.05 #:p<0.1

資料5 課題解決事業に取り組んだ学生の意識の開始前と終了後の平均値の差のt検定結果(N=13)

このデータを見ると、ほぼすべての項目で、大きな有意差が見られ、学生の地域課題解決への意識が、大きく変わったことが裏付けできる。学生が、2「地域支援は面白い」と感じたこと、4「地域の問題解決に積極的に取り組みたい」、5「地域支援の経験は、将来役に立つ」、6「自分のために地域支援をしてみたい」、7「地域の人と交流したら、地域貢献の意味が分かる」、8「学外の交流を深めたい」、9「地域をよくしたいと思っている」というような意識を持つきっかけになり、12「充実感, 満足感」、13「成就感, 達成感」が高まったと推察できれば、本事業はひとり一人の学生の将来への有意義な活動になったと思われる。唯一、10「年齢の違う人との交流は大切」に有意な差が出なかった理由は、資料4を見てわかるように、事前からこの意識が高かったことが想像できる。事後はさらに伸び、一番高い平均値となっている。

引用文献

BWRITE.(2016).”40代以上は「PC」で、20代以下は「スマホ」で。「情報収集についての意識調査」
<http://bwrite.biz/archives/12287>

Appendix 1: 前期 15 コマの授業計画

日	授業回数	授業内容	詳細
4月13日	1回目	滑川視察調査1	TRIOで打ち合わせ
4月20日	2回目	先輩からのアドバイス	取材の視点、地域とのかかわり方
4月27日	3回目	滑川視察調査2	取材1
5月4日	休み		
5月11日	4回目	滑川視察調査3	取材2
5月18日	5回目	情報の整理	AL室
5月25日	6回目	検討会	AL室
6月1日	開学記念日		
6月8日	7回目	滑川視察調査4	観光協会さんのレクチャー
6月15日	8回目	今後の動きを打合わせ	AL室

6月22日	9回目	滑川視察調査5	取材3
6月29日	10回目	検討会	AL室
7月6日	11回目	滑川視察調査6	取材4
7月13日	12回目	検討会	AL室
7月20日	13回目	滑川視察調査7	取材5
7月27日	14回目	COC 成果発表会参加	後期2月1日の発表会を意識して
8月3日			
8月9日	15回目	中間報告会	滑川市役所企画政策課でプレゼン

Appendix2: 後期15コマの授業計画

日	授業回数	授業内容	詳細
10月5日	1回目	外部講師	立山黒部ジオパーク様のレクチャー
10月12日	2回目	取材1	「自然」にフォーカス
10月19日	3回目	取材2	「自然」にフォーカス
10月26日	4回目	富山総合見本市	テクノホール
11月2日		金曜授業	
11月9日	5回目	打ち合わせ	次回の取材計画
11月16日	6回目	取材3	「ひと」にフォーカス
11月23日		祝日	
11月30日	7回目	打ち合わせ	次回の取材計画
12月7日	8回目	取材4	「ひと」にフォーカス
12月14日	9回目	発表会準備1	スライド作成1
12月21日	10回目	発表会準備2	スライド作成2
12月28日		冬休み	
1月4日		冬休み	
1月11日	11回目	発表練習1	プレゼン練習1
1月18日	12回目	最終報告会	滑川市役所観光課でプレゼン
1月25日	13回目	発表練習2	大講義室でリハーサル
2月1日	14回目	学内成果発表会	約30ゼミがポスター発表
2月8日	15回目	振返り	